書評

中島那奈子・外山紀久子編著『老いと踊り』

猪　崎　弥　生

踊ることを生業とする舞踊家にとって，自らの〈老い〉をどのように捉えることができるだろうか。私は44歳で交通事故に遭った時に，自身の舞踊活動においてダンサーとしてではなく振付家としてやっていくことを決意した経験を持っている。その時，自身の〈老い〉というより，踊るということが事故以前に比べ思い通りにならなくなったことがその決意に至った要因であるが，多分，事故がなくても身体的なコントロールという観点でダンサーから振付家の道に進んだであろうことは，容易に想像がつく。ダンサーは「踊る身体」や「見られる身体」がどのような状態であるのかを冷静に感じ取っており，踊れなくなったと判断して退くという決断に至るのは，特に欧米の舞踊文化においては当たり前なことであろう。

2014年５月に開催された国際シンポジウム〈老いと踊り〉における講演と議論が出発点になっている本書は，さらにそれぞれの講演内容をブラッシュアップし，１冊の書籍として再編されている。〈老い〉は生物学的見地から多くの研究がなされているが，その人間にとって誰もが経験する〈老い〉を文化や芸術の側面からの〈踊り〉とともに表舞台に立たせる試みは興味深い。本書は，人間としてのそのような〈老い〉と〈踊り〉を同じ土俵に正面から対峙させ，欧米と日本の舞踊文化の比較にとどまらず，社会的，哲学的，文化的，芸術的な範囲にまで議論を広げる。

本書の編著者は，その国際シンポジウムの仕掛人である中島那奈子と外山紀久子である。中島は，ドラマトゥルク，日本舞踊師範であり，舞踊研究者である。三歳から始めた日本舞踊の世界で，若い頃から評価されるも，踊りに味が出るまでは30年かかると師匠に戒められた経験をもつ。また，日本から米国，ドイツへと舞踊研究者としてキャリアを積んでいく過程では，実年齢よりも若く見られることで，その社会の中での自身の年齢と経験のギャップを否応なく感じさせられたという。そうした経験をもつ中島だからこそ，〈老い〉と〈踊り〉という身体の中で絡み合う概念を，議論の俎板に乗せようとしたのであろう。外山には，舞踊研究者として『帰宅しない放蕩娘：アメリカ舞踊におけるモダニズム・ポストモダニズム』という代表作があり，アメリカポストモダンダンスの作家や作品の美学的考察では右に出る者がいない。だからこそ，中島と外山による本書は，人間の〈老い〉と〈踊り〉への多様な観点をもつ内外の研究者と実践者の論考によって，さらに議論を深化させるものになっている。

本書は，中島の序章「老いのパフォーマティヴィティ－老いる踊り手，老いない踊り」から始まり，「第Ⅰ部　踊りの遺産」「第Ⅱ部　伝統での老いとポスト・ジェネレーション」「第Ⅲ部　グローバル化する老いのダンスドラマトゥルギー」と３部構成になっている。最後に番外編として，外山の第12章「旅立ちの日のための『音楽』（ダンスも含む）」が収められている。

序章では，〈老い〉を行為遂行的に捉えようとする試みは，私という主体を巡る議論へと広がりを見せる。ジュディス・バトラー（Judith Butler）による主体構築の理論を含むいくつかのパフォーマティヴの捉え方から，ジェンダーと同様に〈老い〉も主体を構築する過程に組み込まれていると提起する。だからこそ，〈老い〉を〈踊り〉の中で議論することの必然性があり，大野一雄，イヴォンヌ・レイナー，日本舞踊などの様々な実例の中から浮かび上がってくる舞踊文化への新たなパラダイムシフトに目を向けさせる。

第Ⅰ部，ガブリエレ・ブラントシュテッター（古後奈緒子・針貝真理子訳）による第１章では，舞踊における〈老い〉についての観念をどのように拡大しうるのかという問いに向けられ，ピナ・バウシュの《春の祭典》の制作と稽古と継承のはざまにある「遺されたもの」から考察がなされている。「遺されたもの」とは，ピナの身体を通してダンサーに譲り渡される行為そのものであろう。第２章で貫成人は，老いが隠微され忌避されてきた欧米の舞踊と，舞踏や日本の舞踊の高齢者の演者が珍しくないという状況において，「老いとはなにか，また老いの舞踊は若年者や壮年者にはできないなにを可能にするのか」に答えを求めようとする。貫が述べるように，舞踊の場合は，踊り手と老いの関係は複雑になる。演者の年齢とは無関係に〈老い〉が踊られ，表現される。「役柄」としての老いもあれば，演者自身が老いて踊るという，表象の対象とも，主体ともなる。だからこそ，歴史的諸相，哲学的分析から「老い」の４つの構造を導き出し，「生の根源構造を露呈し，個人の鎧が解除され，異界の住人になった者が〈老者存在〉である」と位置づける。第３章は，イヴォンヌ・レイナー（外山紀久子訳）の手記である。実際に老いてゆくダンサーが踊った実感とその時の観客の様子が読み取れる。彼女は，著名な舞踊家の最後のダンスの状況を踏まえながら，いつ舞台を去るかは個人的な問題であると言う。イヴォンヌ・レイナーは40歳で完全にダンスから離れたが，2000年にダンスに復帰し，自身が踊った《トリオＡ：トーク付きおいぼれ版》で想起した言葉には，「…老いていく身体はただそれだけで意味を持っており，…不適当とか劣っているとか判断される必要はないのです」とある。ラムゼイ・バート（越智雄磨訳）による第４章では，1960年代にジャドソン・

ダンス・シアターで踊ったパクストンらの踊ることへの向き合い方への変化は，彼らが踊り続けることを可能にしている事実をもたらしたと述べている。それは，消費主義的な言説へのカウンターであり，オルタナティヴな思考法を提起している。「ダンスの実践は，老いによる身体的な衰弱を無視するよりむしろ，他者と関わり，老いた身体に順応する方法を提案している」と結論づける。

第Ⅱ部，レノーラ・シャンペーン（常田景子訳）による第５章では，メレディス・モンクの，老女からどんどん若くなり最後は少女になっていく《少女教育再訪》の再演の状況と，シャンペーン自身のソロ作品の台本から，一人の女性の「老い」は生きてきた過去の記憶や遺したものから浮き上がってくる時間の層の中で見えてくることを示している。第６章において渡辺保は，クラシックバレエといわゆる日本舞踊における踊り手の身体とその踊りについて３つの違い（表現の方法論，そこに描かれる人間像，人間の身体に対する考え方）を明快に説明する。その３つの違いを端的に説明すれば，《娘道成寺》の場合には演者が70歳をこえても「娘」であり，《ロミオ》は，ロミオと演者が身体的にも人格的にも一致している。ここに，日本舞踊における修行を積んだ「型」の効用があり，人間の身体をイメージとして捉える傾向があると述べる。次に，2014年５月23日国際シンポジウムの時の花柳寿南海×花柳大日翠×渡辺保の鼎談がまとめられている。人間国宝の寿南海の《都見物左衛門》のビデオを見ることから話が始まり，その中で寿南海の踊りや芸への向き合い方，弟子である大日翠との関係性が見えてくる。渡辺の「やはり歳取らなければだめなのです」という言葉で鼎談が終わる。その言葉は，日本舞踊の〈老い〉は，修行を積み重ねていくからこそ，そこに芸の味わいや高みがあることを示している。第７章では，尼ヶ崎彬が舞踊作品の登場人物の老い「演じられた身体」と踊り手自身の老い「演じる身体」を区別して，〈老い〉を３つの視点「衰退」「年功」「余生」から，〈老い〉とはどのようなものであるかを説明する。さらに，「演ずる身体」が「老いた身体」である大野一雄が何故世界の舞踊界に衝撃と感動を与えたのか，３つの視点から分析し，大野が見せる「死と生のはざま」を歩む「翁」の姿は，「老いた身体」でなければなしえないことであると述べる。

第Ⅲ部，第８章では，ライブパフォーマンスと映像を融合させる演劇作品などを手掛けるやなぎみわが老女や少女の存在を演出すること，さらに老女神信仰の考察やデコトラの移動舞台車で繰り広げられる老女の物語を通して，女性の生きる時間の在り方を見つめようとしたプレゼンテーションが提示されている。第９章では，宗教哲学者の鎌田東二が身体としての「翁」神のイメージを考察する。「翁」神が「童」神に変容する神話の表現としての「翁童身体」の位相を読み取ることによって，「『翁』は『智慧（叡智）』，『童』は『生命』ないし『力』の象徴である」とする。日本の神話にみられる神聖身体として捉えられる〈老い〉と，神楽や申楽になっていく〈踊り〉がそこに明らかにされている。第10章では，中島那奈子は，ピナ・バウシュのかつてドラマトゥルクであり，現在ドイツ人振付家・ダンサーであるライムント・ホーゲ作品《An Evening with Judy（ジュディとの夕べ）》（2013）の上演分析を通して，〈老い〉と〈踊り〉の関係をヨーロッパと日本における舞踊上演の歴史と制度，さらに老いの知覚構造から論じようとする。第11章における國吉和子は，「老人のように四肢の固まった，運動量の少ない不自由な動きがその特徴のように語られることの多い舞踏」と「老い」はどのような接点を持ちうるのかをテーマに，大野慶人の自身についての語りと《命の花》のパフォーマンスを通して，舞踏と「老い」の出会うところを探ろうとする。舞踏と「老い」の出会うところは，土方巽の最重要語である「衰弱体」の意味を問うことと，舞踏における「技法」と「技術」を明確にすることの中にあるのではないかと述べる。

番外編第12章で外山紀久子は，死の不可視化や死者儀礼を失いつつある状況において「極めて素朴に，素人の視点から老いと死の問題を舞踊との関係の中で考えることを試みる」としている。タナトロジー・アートの例，野口晴哉の「整体」の思想と実践から「気」とダンスへと論を進め，脱主体化による「ダンス状態」や「憑依的」身体へと精神性を有する身体の持つ可能性について言及する。

〈老い〉は現代日本社会が抱える喫緊の課題である。元気で若い高齢者が増えてきたのも事実であるが，内閣府の調査によれば，総人口に占める65歳以上の人口の割合は約28%にもなることから，それは国の生産力の低下につながり兼ねない。本書ではこうした現実に迫りくる〈老い〉ということよりも，連綿と続いてきた舞踊に〈老い〉がどのように絡み合っているかを上述した12章の論考から議論を広げた。それは誰にも訪れる死の手前にある老いという状況を不吉なものではなく生きるエネルギーとして捉え，老いることと踊ることを同列に考えること。つまり，人の生き方と舞踊表現の在り方を同時に見つめようとするものであった。踊るという営みの中に人間の老いていく時間軸は必ず存在する。舞踊には，現実の身体と観客の見るイメージとして想像される身体が作品上に同時に存在するからこそ，生きるという時間軸を超越して〈老い〉という現象を受け入れることが可能な芸術のひとつになり得るのである。

（勁草書房，2019年２月刊行）